

水の神、灯ろう流しや雨ごい

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



鈴蘭公園(音更町)下の河川敷にあるわき水。「不動明王」がまつられ、右写真のように「龍神の滝」の石碑もある。

和人にとっても、アイヌの人たちと同じように、川はありがたいものであり、そして恐ろしいものでした。

水の神である「水神」に対する信仰は古くからあり、水分神社などが水源や川の合流点にまつられています(奈良県の吉野水分神社など)。

また、竜(龍)やへびを水の神や川の神として考えることも多く、「八岐大蛇(8つの頭と尾を持つ大へび)」の伝説は、支流を持つ川の洪水の話とも考えられます。福井県の九頭竜川(p165)は、その名前から、「九つの頭を持つ竜」としておそれられていたことがわかります。

音更町鈴蘭公園の十勝川河川敷では、ガケからわき出る水が「龍神の滝」「滝の不動」として、まつられています。



灯ろう流し。

灯ろう流し

川の水や流れは、罪やけがれを清め流す、と考えられてきました。また、川の流れは死後の世界とつながっていると考えられ、お盆には亡くなった人を思って供え物を流したり、灯ろう流しをしたりといった行事がおこなわれてきました。鹿追町の然別湖や中札内村の恵津美川などでは、毎年、灯ろう流しがおこなわれています。

死者への思いだけでなく、川や湖をいつまでもきれいに、という思いもこめられています。最近では、そうした考えから、流しっぱなしではなく下流で拾い上げるようになってきています。

雨ごい

大雨による洪水とともに、雨が降らないことによる干ばつも、農業にとっては大きな痛手となります。

十勝でも雨不足が起きたことがあり、こうした時には、神に雨を願う「雨ごい」がおこなわれました。

昭和5年(1930)に池田町でおこなわれた雨ごいでは、数人がみのを着て笠をかぶり、然別湖(鹿追町)まで水をもらいに行きます。地元に残った人たちは、丘の頂上で祈りをしていました。

然別湖から水をもらった人たちが大森(池田町)に着いたとたんに大雨になったといえます。



美しい水をたたえる然別湖(鹿追町)。昭和の初めころは、やっと観光開発が始まったところで、今よりはるかに山おくであるイメージが強かった。

1 八岐大蛇(やまたのおろち): 日本書紀(にほんしょき)などに描かれる神話の大へび。スサノオノミコト(須佐之男命)に退治される。斐伊川(ひいかわ): 島根県・鳥取県のことだといわれている。

2 不動(ふどう): 不動明王(ふどうみょうおう)のこと。仏教の信仰対象で、密教(みつきょう)の根本尊(こんぽんそん)である大日如来(だいにちにょらい)(またはその使者)が悪魔を降伏するために恐ろしいすがたをしたもの。その心はきびしくもやさ